

ハイデルベルク信仰問答講解説教1「本当の慰め」(2011年8月7日 礼拝説教)

【聖書箇所】

ヤコブよ、あなたを創造された主は イスラエルよ、あなたを造られた主は今、こう言われる。恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ。水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の中を歩いて、焼かれず 炎はあなたに燃えつかない。(イザヤ43:1-2)

わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるか死ぬか主のために生き、死ぬかすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のもの。キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです。(ローマ14:7-9)

【説教】

まず今日の第一主日の問答をお読みします。

今日の主の日より、新しくハイデルベルク信仰問答による説教を開始いたします。どういう説教になるのだろう。内心、ちょっと心配だと思われる方々もいらっしゃるかもしれません。おそらくこの錦ヶ丘教会の歴史の中でも初めてのことでないかと思えます。かくいうわたくしも初めてであります。ですから普段の聖書講解とは少し勝手が違うので慣れないところがあります。今、わたくしは問答の言葉を自分で読みましたが、これも全員で読んだ方がよいのではないかと考えます。説教準備もただ聖書の釈義をすればよいという訳ではない。何よりハイデルベルク信仰問答について学ばなければなりません。このハイデルベルク信仰問答についての解説書が現在わたくしの手元には10冊あります。これに目を通すことも一苦勞です。加えて与えられた聖書の釈義をする。これまでの説教よりも正直手間がかかるのです。そこまでしてこれをやる意味があるのか。

今回の説教を始めるにあたり、皆さんにまず心得てほしいことが二つあります。一つはこの説教を通して、「教会的信仰」を身に着けていただきたいということ。信仰は個人の信仰ではありません。わたし流の信仰理解が信仰なのではない。信仰は、教会という共同体の信仰です。それにアーメンと同意する。この教会が受け継いできた信仰をわたしの信仰にすること。それが信仰であり、その信仰の同意を洗礼という形に表すのです。特にハイデルベルク信仰問答は、わたしたちの教会の伝統、改革派の教会で重んじられてきたものです。ですからこの説教を通して、わたしたち改革派の教会がどういふ信仰を受け継いできたのか。どういふ信仰に生かされてきたのか。それを身に着けていただきたいのです。

そしてもう一つは、「教理的信仰」を身に着けていただきたいということです。教理的という言葉にすでにアレルギーを感じる方もいらっしゃるかもしれません。難しいのではないか。場合によっては、教理などは要らない。聖書があればそれでいいではないかという人までおります。しかしはっきり申し上げて、それは非常に軽率な考え方であり、教理と聖書を分けて考える。しかしこれは決して分たれるものではありません。同じ根を持っている。教理的であることは同時にそれは聖書的でもなければなりませんし、聖書的であることは同時に教理的でもあるのです。聖書の示す救いの筋道こそが教理だからです。その筋道がはっきりしないまま聖書を読むことは、ちょうど地図やコンパスを持たずに山に入る。羅針盤のない船で大海原に船出するようなものであります。こんな危険はないでしょう。教理的であることがどれほどわたしたちにとって安全なものであるか。安心して目的地、聖書の示す救いに向かうことができるのです。そういう教理的な信仰を持つ時に、わたしたちは本当に足腰の強い信仰の歩みが可能になると思うのです。

牧会者として感じることは、信仰を気分の問題として受け止

めている人が案外多いということです。何か精神安定剤的なもの、気休め程度のもので考えている。そうすると教会生活も言葉は悪いですが、「いい加減」になります。気分が向いたら教会に行く。熱心な時とそうでない時の落差が大きい。そうでない時は、まるで自分が信仰者であることも忘れてしまうような生活をしている。そして何か困ったことがあると教会に来る。あるいは、ちょっとしたことでつまずいてしまう。どうせ教会に行っても行かなくても変わらないじゃないか。そうやって止めてしまう。それはまだ信仰の入り口のところでうろろしているような状態です。まだまだその喜びの深みに入っていないのです。教理を身につけることは、そういう熱しやすく冷めやすい信仰を卒業して、本物の信仰を体験すること。それによって浮き沈みのない、安定した信仰の歩みが可能になる。人につまずいたり、飽きてしまうようなことがない。そういう足腰の強さを身につけていただきたい。

今、気休めということを言いました。聖書が与える救いは、そういう気休め程度のものでしょうか。よく気分転換のためにスポーツをしたり、音楽を聴いたりする人もいるでしょう。社会生活をする中でいろいろとストレスを感じることも多い。その解決を信仰に求めているとすればそれはどうなのでしょう。信仰が与えることができるものはその程度のものでしょうか。

そこでこの有名な第一問に改めて聞いていただきたい。「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか」「生きるにも死ぬにも」とあります。この問いの立て方は「生きること」と「死ぬこと」を一つのこととして考えている印象を与えます。この問いがどこから来ているか。それは今日読みましたローマの信徒への手紙第14章8節から来ていることは明らかであります。(読む) ここには「生きるにしても、死ぬにしても」と訳されています。以前の口語訳も同じ訳し方をしています。「生きること」「死ぬこと」がやはり一つのことなのです。

人間は、ただ「生きること」だけを考えていけばよいのではない。「死ぬこと」も考えなければなりません。生も死も含めてわたしの人生なのです。生きることも大問題ですが、死ぬこともこれは大問題です。死ぬことなど考えられないという人がいるかもしれません。でもそこまで考えない、本当に自分と向き合うことにはなりません。わたしたちの人生には考えたくない、目を背けたくなるような現実があります。でもそれを含めて人生なのです。いやそれを見つめる中でこそ、本当の生が見えてくる。今、生かされていることの意味が見えてくる。そういうものではないか。「生きるにも、死ぬにも」そういう全体で人生を考える。でもその人生がただ一つの慰めで救われるというのです。生も死もすべてを包み込む救いが聖書に示されているのです。

先週は、別府で青年の修養会がありました。九州の各地から、下は高校生、上は社会人の人たち25名程の参加でした。わた

くしも久しぶりにそういう青年の集いに参加して三日間楽しい時を過ごしました。この年になって、夜中にマクドナルドでアイスを買って、浜辺で星を眺めながらおしゃべりするなんてことをするのは思いもよりませんでした。でも若いっていいなあと思直しました。そういうことができるのです。皆さんもそういう時代があったのではないのでしょうか。

皆、普通の若者、現代の若者です。洗礼を受けていない方々もいました。でも真剣に信仰について考えようとしていました。自分が生きることの意味を真剣に見出そうとしていました。ある方は仕事を辞めて今休職している自分が存在することに意味があるのかと目に涙をためながら話していました。両親が離婚して、そのことで進路が大きく変わらなければならなくなった高校三年生の女子高生がその胸の内を話していました。自分はこの先どうなるのだろう。人生の大問題。あまりに重すぎる、担いきれない問題。そういう問題を抱えながら生きている。でも皆、一生懸命に御言葉に聞いていました。そこに答えが必ずあると信じて。皆さんにもそういう御言葉の聞き方をしてほしい。答えがあるのですから。

その答えをハイデルベルク信仰問答は、第一問で明らかにいたします。これはすべての結論をまず述べるという手法です。人生の問題のすべて、生きるにも死ぬにも、もう答えがここにある。そこに向かって聖書は語り始めている。この説教もそうです。もう答えはある。「わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主、イエス・キリストのものであることです」それが答えです。

「わたしがわたし自身のもではなく」ここにすでに一つの衝撃があります。単純にわたしはわたしのものだと考えます。この人生も、人生に起こってくる様々な問題も全部わたしのもの。だからわたしが解決しなければならぬ。あるいはわたしたちは、自分のものとして獲得することを常に求めてきた。そこに幸せがあると。結婚して家庭を築くことも、仕事をして安定した収入を得て成功すること。それを全部自分の手中におさめること。それが幸せなのだ。それがこの世の価値観です。しかし、それをひっくり返す。そういうことを全部自分のものとしてかき集めているときに、そこに救いはない。そうではなくて自分のすべてがキリストのものになっているということがよく分かったときに、そこに本当の慰めが生まれてくる。握りしめているものを手放す時に見えてくる本当の救いがある。それは実は自分が握りしめられていること。神さまに捕らえられているということです。

「生きるにも、死ぬにも」先ほどはここに人生の大問題があると言いましたが、この問答ではこのことよりもっと重大なことがあると教えているように聞こえます。それはキリストのものになっているかということ。そこにわたしの人生を決定づける大問題がある。そこで人間は初めて人間らしく、すべての束縛から解放されて自由に生きることができるということではないのでしょうか。

「イエス・キリストのもの」ということは、キリストに属するということです。キリストの主権のもとに、そのご支配に服すること。そこに本当のわたらしさがある。元々、人間はそうのように神さまによって造られました。「神のかたち」に造られた。それは人間が神さまのものとして、そのご支配にあるものとして造られたことを意味しています。しかしその神さまのものであることを捨てたのが人間の罪です。神さまのご支配に生きるよりも、自分が神になって、すべてを自分のものにする。そこに幸せがあるかのように考える。でもそうではなかった。そこに生じてきたものは、あのカインとアベルの話にあるように、人の命を奪い支配することであり、バベルの塔にあるような奢りと混乱であります。この罪に人間は縛られ、本来の祝福された人間らしさを失ったのです。

けれども、神さまはこの罪からわたしたちを解放してくださいました。そのために大切な独り子イエス・キリストを与えられたのです。そして「この方は御自分の尊い血をもって、わ

たしのすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました」そう信仰問答は告白します。ここにすべての解決がある。わたしの人生の問題もすべてキリストが絡めとって、御自身のものとしてあがなわれるのです。あなたの抱えている問題も、人生の重荷のすべてを全部キリストが担われるのです。わたしが解決してあげよう。

そこでこそわたしはわたしがらしく生きることができる。そこに本当の慰めがある。救いがある。キリストがその命をもって、わたしたちを罪の支配から買い戻し、御自身のものとしてくださった。それがわたしの人生を決める決定的な出来事なのです。どうかその救いに委ねてください。自分のものであることより、真実な救い主イエス・キリストのものであることを求めてください。教会はこの救いによって絶えず慰められ、癒されて、今日まで立ってきたのです。その救いに日々生かされてまいりたいと思います。祈りをささげます。